

(論文博士・様式10) (Doctoral qualification by publication, Form 10)

# 学位論文要旨

Abstract of Doctoral Thesis

氏名：長田 洋一

論文題目：自閉症スペクトラム児の対人関係の向上を目的とした心理劇的アプローチの開発  
—小学校の通級指導教室における自立活動の授業実践を通して—

論文要旨：

本研究の目的は、自閉症スペクトラム(ASD)児の対人関係を向上させる新しい指導技法を開発することである。学校現場では使われてこなかった心理劇を小学校の通級指導教室で自立活動の授業に導入することを目指した。その背景を長田が通級指導教室で行った3つの事例から述べる。事例1では、読み困難な児童に漢字の読み能力の向上を図った。事例1からは、教科の補充指導には限界があり、生きる力を養うには自立活動を行う必要があることが示唆された。事例2では、海外移住が決まった途端に問題行動を起こした発達障害児に応急処置的に自立活動で交流や異文化理解を行うことによって心理的な安定を図った。事例2からは、問題点を根本的に改善するためには年度初めから意図的、計画的にソーシャルスキルトレーニング(SST)を行う必要があることが示唆された。事例3では、他害行為をするASD児をクラスに適応させるために自立活動でSSTを行った。事例3からは、個別指導で行ったSSTがクラスの中で生かされるためには小集団グループで指導する場を設けたり、クラスの中で常時付き添う支援員を配置したりして般化プログラムを組む必要があることが示唆された。また、通級指導教室の担当教師にアンケート調査を実施したところ、SSTのやりにくさを指摘する意見が多く出され、「楽しく繰り返し学習できる教材」や「ロールプレイング的な活動」といった新しい指導技法の開発を待ち望む意見もみられた。

以上のことから、般化プログラムを組まなくても改善が期待できるようなSST以外の新しい指導技法として、「心理劇」に着目した。

心理劇は、精神障害者の治療方法として医療現場で用いられていたが、1990年代から療育や福祉の場で発達障害者に適用され始めた。学校教育現場では、特別支援学校でわずかに試みられたのみである。そこで、本研究では心理劇を小学校の通級指導教室でASD児の支援に適した形に変更して実施することにした。

心理劇は一般的に台本や取り決めがない状態で進行していくが、ASD児は先の見通しが持てないと緊張したり興奮したりする傾向がある。そのため、台本を用意し、筋書きが定められた心理劇を行うことにした。高良・大森ら(1984)は入院中の統合失調症患者に「童話を用いた心理劇」を行い、童話の筋にとらわれることなく自由に演じてよいとした。この

「童話を用いた心理劇」(高良ら, 1984)の手続きや方法を小学生の ASD 児に適した形に変更したものを、「心理劇的アプローチ」と名づけた。心理劇的アプローチは、担当教師 1 名と ASD 児 2 名の 3 名で行い、筋書きを守って演じさせた。その理由は、ASD 児の即興性に対する不安や緊張を避けるためであり、また、道徳の学習につながるように意味のある終わり方をするためでもある。

実施の手順とその意図は以下の通りである。

- ①「映像によるフィードバック」(3分)：児童が活躍した前回の映像を見せ、劇への意欲を高める。
- ②「役割決めの確認」(3分)：児童の意向を尊重し、なるべく希望に沿うように配役する。
- ③「台本の音読」(5分)：劇で言うセリフを自覚させて見通しを持たせるため、児童にも音読させる。
- ④「準備」(4分)：劇場面を具体的にイメージするように道具や衣装を児童に装備させる。
- ⑤「劇化」(15分)：筋書き通りに演じさせることによって道徳的な学習にもつなげていく。
- ⑥「シェアリング」(10分)：口頭発表と感想文によって 2 度の振り返りを行う。
- ⑦「次回の予告・片づけ」(5分)：次回の題目と配役を決め、児童に自分が演じる役のイメージを持たせる。

以上の手順で、4 グループ 8 名の ASD 児(A 児～H 児)に、グループごとに 12 回から 22 回の心理劇的アプローチを実施したところ、次の 4 つの成果がみられた。

- ① 集団活動への参加意欲が高まった。A 児、D 児、F 児が該当
- ② 仲間意識が芽生えた。 B 児、E 児、H 児が該当
- ③ こだわりが減少した。 C 児、G 児が該当
- ④ 思いやりの心が育った。 C 児、D 児、E 児、F 児、G 児、H 児が該当

8 名全員にいずれかの成果がみられたことから、心理劇的アプローチは ASD 児の対人関係の向上に有効であり、通級指導教室で行う小集団指導に適していることが示唆された。

実施に際しては、20 回程度継続することによって内面的な変化が表れ、児童が希望する童話を取り上げることによって劇への意欲が高まり、児童が活躍した場面の映像をフィードバックして見せることによって自分や相手の児童の長所に気づくことが示唆された。

心理劇的アプローチの長所は、児童が主体的、意欲的に取り組むことができ、終わった後に満足感が得られることである。短所は、担当教師が 1 名しかいないため、監督と補助自我を兼務しなければならないことである。短所を克服するため、担当教師は監督としての立ち振る舞いかたや劇を終了するタイミング、児童への効果的な働きかけのしかたなど、事前に周到な準備を積んだ上で授業に臨む必要がある。

なお、今後は心理劇的アプローチが持つ適用可能性や適用の限界について検討していくことを課題とする。具体的には、①対象児童を LD 児や ADHD 児に拡大する、②特別支援学級でも実施する、③劇に参加する児童を増やす、④観客を設定して行う、など多様な条件のもとで心理劇的アプローチを実施していく。